

堀田曉生氏が作成された現在の千里山周辺の地図に小字を書き込まれたものを拝見するといろいろな事実が浮かびます。一面に果樹園や畑が広がっていた千里山に宅地を造成し、道路を造り電気や水道を引く段階では勿論町名など付けられるはずはなく、電柱の所在地を明らかにするためには唯一の地名「小字」(土地売買の登記や納税のために利用されたもの)しか使うものがなかった事は、堀田氏のご指摘を受ければ尤もと肯けるのですが、浅野さんもそこまでは気付かなかったとのことでした。

二. 千里山に町名は存在しなかった

千里山住宅販売パンフレットには「若葉町」、「楠町」など町名が付されたものがありますが、正式には使われず昭和40年代の町名改正まで単に吹田市(大字)千里山に番地が付くだけ、郵便配達泣かせでした。

終戦直前に東・西・南・北の四町会組織が出来、実態がどうであったか知りませんが、後年まで地域の呼称(戸籍や郵便の宛名には使えない)として「南ノ三組」などと使っていたと記憶しています。

例外として、何故か下新田に向かう坂道の辺り(千里山の西の端)だけには「桃園町」、「竹園町」の町名が定着していました。

三. なぜ豊津の電柱に「河田山」のプレートが?

千里山駅から旧千二小へ向かう道の両側は「河田」と呼ばれていました。旧千二小の辺りから千里山を望むと水源道を最高点として山(というよりは丘陵)に成っていますので「河田」から見える山として「河田山」という字名が付いたものと思われます(余談ですが新田村側からは「佐井寺山」と呼ばれていたそうです)。「小字」としての「河田山」は地図にあるとおりレッチワース通り(昔の本通り)の北側第二噴水付近迄、水源地を含む南側は「河原谷」と呼ばれています。

浅野さんは文中で更に南にある、千里山開発以前から桃の花見で賑わった「五里山」、「十八谷西原」の一带も通称「河田山」と呼ばれたのではと推測されています。

この後記を書くに当たり浅野さんより推測の裏付けとして、何冊もの文献を調べられた結果をメールして頂きましたのでご紹介します。

「河田山」の場所を、佐井寺村史(明治十四年)で調べてみました所、「字河田山」の項目のところで、この場所は、現在の千里山西五丁目あたりだとの確認が取れましたが、注釈として、佐井寺から見て「河田」の向こう側の山を、一括して「河田山」と呼んだと云

う事が記載されており、それに着目して、「河田山」を「小字」の場所に限定せず、「山」として、拡大解釈をして見る事に致しました。

次に、佐井寺村史の「字瓦谷」の項目を見ました所

●河原谷とも書く

●河田山の南半分を含む一带と、書かれていましたので、河原谷も「山」としての「河田山」の一部と見做しても差しさわりが無く、「河田山」の拡大解釈をしても大丈夫だとの認識を持ちました。

更に、佐井寺村史には「名勝」として、愛宕山に引き続き河田山と三本松が紹介されており

○河田山ハ村ノ西ノ方十五町ニアリ

●千里山南隅ノ一端ニ位シ豊島郡ノ境界ナリ

●此山素ヨリ礫白砂多ク交リノ禿山ニシテ、其質至テ悪シ、瘦赤松屈シテ用材ニ不堪、庭樹盆栽ニ堪ル而已。

●又松ノ木間ニ一円躑躅ヲ生シテ春花之頃ハ美麗ニ堪遊客続々タリ、然レドモ村益に不功。

●有志之者協議シ、明治五年ノ頃ヨリ開拓シ、最早八九分通りニ及ボス、悉皆桃樹ヲ培養ス、該木数凡二万五千株、両三年前ヨリ花爛漫ノ頃素ノ如ク遊客続々タリ

○是山ノ西ノ方ニ聳エタル高峰アリ三本松ト云フ。

●老松三本並立ツ故ニ三本松ト称ス。

●此峯ヨリ西南ヲ眺望スレハ叢示モ眼ニ遮ルモノナシ、西ハ武庫山六角山甲山摩耶山、南ハ淡山紀ノ加田沖マデ一目衆々トシテ見エ、尚内海蒼濤ニ出没スル艇船宛モ庭池ニ鷗鴎ノ浮ブガ如シ、眼下ノ畝野ノ春季菜麦ノ青黄色一円花氈鋪ヲシキタ陽殷トシテ海ニ赫ク、此瀾景ヲ見レバ浩然氣ヲ自然養フトシカ云フ。

以上の文章を見た時には、昔、三本松があった「五里山」も、この文書では、「山」としての「河田山」の一部と見做しており、「河田山」の範囲を拡大解釈しても間違いではなかった。との、確信を得ました。

「河田山」をこの様に捉えると、河田山名の電柱が、豊津交番前から始まり、下の噴水の手前で終わっている事に、違和感はないかと思えます。

「河田山」の電柱の施設者は、どのような理由で、命名をしたのか、判りませんが、昔の事でもあり、関西電力に聞いても、恐らく、その理由は判らない事と思われまます。

以上

編集部 奥田記